

労働過程と資本主義的生産様式

神 田 敏 英

岐阜大学教養部経済学研究室
(1979年10月11日受理)

The Labor Process and the Capitalist Mode of Production

Toshihide Kōda

1. 序 論

マルクスは『資本論』序文において、「この著作で私が研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、これに対応する生産関係と交易関係である」と、明言している。しかしながら、この明らかな言葉は後のマルクス主義者に十分注意深く護られてきたとはいえないであろう。経済学のいわば定義ともいうべきあからさまな箇所、早くも修正——というよりもむしろ見落しともいうべきであろうが——が始まる。レーニンはこう述べる。「歴史的に特定のある社会の生産関係を、その発生、発展、衰退において研究すること——これがマルクスの経済学説の内容である⁽¹⁾。」見るとおり、「生産様式」がすっぽり抜け落ちている。一人レーニンだけの、また彼の時代だけのことではない。生産様式、生産力、生産関係の概念にかかわる最近の論議は、これらの基礎的概念についての共通理解がどれほど少ないかを物語っているといえよう。経済学の対象を生産関係に限る時、それと別個に生産力の概念を構成し、両者を「統一」させることは易しいことである。それに対し、生産様式を生産力だけと結びつけば、まさにそれによって生産関係と切り離され、両者が相互規定するといっても、その関係は外面的、形式的なものにとどまるであろう。しかし、本来マルクスにあっては、生産力こそ社会的、歴史的なものであり、その一定の発展段階に生産関係が対応すべきものである。したがって、生産関係の社会的・歴史的な性格はそれ自体からではなく、生産力とのこの照応の中に見い出さねばならない。こうして、生産力のこの性格の把握が経済学の中に入り込まざるをえない。生産力と生産関係の照応の場が生産様式に他ならない。

資本主義的生産力の解明は直接的生産過程、労働過程において行われる。『資本論』におけるその提起は第5章で行われるが、その仕方は、「どんな特定の社会的形態にもかかわらず考察」という特徴をもつ⁽²⁾。とはいえ、労働過程は第5章でそのように考察されるということとどまらず、一方では『資本論』全巻にわたってその規定性でとらえられると同時に、まさに資本によって変化され特徴づけられた労働過程としても考察されてゆくのである。マルクスは、はっきりと前者を指す場合には「本来の労働過程」、後者には「現実の労働過程」ま

たは「資本主義的労働過程」等の表現を用いる。両者は区別されるべきであるが、その区別は異質性または類型ではなく、論理的序列の差である。いわばその上向の中こそ、資本主義的生産様式解明の鍵があるのである。それゆえ、その上向過程を追跡することによって、『資本論』の展開の筋道を明らかにしたいと考える。

マルクスの労働過程の把握、即ちそれを自然のおよび社会的過程の二重性においてとらえる思想は、既に『経済学・哲学草稿』の基調をなし、『ドイツ・イデオロギー』で確立されたとはいえ、資本主義的生産様式分析の明確な一段としての労働過程の定立は、未だ『経済学批判要綱』（以下『要綱』と略す）でも行われず、そこでは「労働過程」というよりも「単純な生産過程」という表現でもって「資本の生産過程」叙述全体の中に混在されているのであり、『資本論草稿』（以下『草稿』と略す）において初めてなされ、『資本論』においてその完成した姿を採るのであり、以後その方法的構成は変わっていないのである。

2. 『資本論』第5章における「労働過程と価値増殖過程」

『資本論』第5章における「労働過程と価値増殖過程」の提起の仕方は、簡単であるが、同時に極めて明確な論理的限定をもっている。まず第一に、それは第4章貨幣の資本への転化、で資本成立の必要条件たる労働力商品が導き出されたのを受け、その労働力商品の消費の場としての資本の生産過程として定立されるが、第4章が唯一つの章で一つの篇の地位を与えられているのに対し、第5章は第4篇絶対的剰余価値の生産、の一章として位置づけられるのである。その理由を考えることは、絶対的剰余価値生産の論理次元、さらにそれと相対的剰余価値生産との関連、を考える上で不可欠の課題である。第二に、生産過程が労働過程と価値増殖過程の二側面において分析された後に、結果として資本主義的規定性を賦与されていることである。即ち、生産過程を労働過程に即してとらえることの意義と妥当性、およびそれらと資本主義的規定性との関係が問題として浮び上る。第三に、その二面把握は、「商品に表わされる労働の二重性」に立脚するとはいえ、その規定の単なる再現、繰返しではなく、新たな段階規定を与えられており、それぞれの段階における限定の正当性が問われなければならないのである。以上のような限定は、第5章全体を特徴づけているのだから、その意義と正当性はその内容の検討を通じてのみ与えられる。

第1節「労働過程」の主題は次のように提起される。「資本家が労働者につくらせる物は、ある特殊な使用価値、ある一定の品物である。使用価値または財産は、それが資本家のために資本家の監督のもとで行われることによって、その一般的な性質を変えるものではない。それゆえ、労働過程はまず第一にどんな特定の社会的形態にも拘りなく考察されなければならない⁽⁹⁾。」まず、資本家が労働者に物をつくらせるという形で、過程が提起されるが、その仕方には拘らずに一般的性質が存在しているという。この表現は、事実上、『要綱』における「生産一般」を指しているといえよう。次いで、直ちに「労働過程」という主語があらわれる。この言葉は当然前文を受けているのだから、その無雑作な無規定の使用から示されるように、それは使用価値の生産、その一般的な性質と等置されているのである。さらに労働過程のこの限定は、「まず第一に」であって、労働過程がこの文の限定につきるということではなく、逆に「社会的形態」をも顧慮した規定が別途上程されねばならないことを暗示しているのである。そして、この限定は明白に第5章第1節だけに限られる。それはあくまで抽象である。この場合に、では何故そのような取扱がここで必要なのか、という疑問が当然提起されよう。ある要因ないし属性の存在を指摘することと、この時点でそれを抽出分析することとは別問題なのだから。

この抽象の上では、「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御する。人間は、自然素材に対して彼自身一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用しうる形態で獲得するために、彼の肉体にそなわる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。」労働を人と自然との物質代謝活動ととらえることから、労働の積極的作用、その対象としての自然が浮び上る。しかし、もう一面労働は人の自然力の発動としてとらえられるのだから、そこでは人と自然とは統一的にとらえられる⁽⁴⁾。後に詳しく展開される労働のこの両面がこうして冒頭ではっきりと特徴づけられているのであるが、しかし今一面、人と自然との物質代謝としてとらえられる限りでは、労働は未だ人独自のものとして位置づけられてはいないのである。あらゆる生物の生命活動も自然との間の、自然における、自然そのものの過程であり、生物が自己特有の自然力で以って主体的に行う過程である。マルクスはここでは、「労働の最初の動物的な本能的な諸形態は問題にしない」（ましてや植物の物質代謝は）のであるが、にもかかわらず、労働をそこまで還元していることに注目すべきであろう。それは、資本の生産過程から抽象的な労働過程を抜き出したのと同一のやり方であるといえるだろう。もちろん彼は、「ただ人間だけにそなわる形態にある労働を想定」しているのであり、物質代謝活動それ自体に還元しきってしまっているのではない。とはいえ、この還元は、人の労働がどれ程独自のものになるにせよ、その根底を特徴づけるものである。この基底に立ってはじめて、その独自性が明らかになるともいえよう。

マルクスはそれを次のように提起する。「労働過程の終りには、その始めに既に労働者の心像の中には存在していた、つまり観念的には既に存在していた結果が出てくる。労働者は自然的な物の形態変化を惹き起すだけではない。彼は自然的な物のうちに同時に彼の目的を実現するのである。その目的は、彼が知っているものであり、法則として彼の行動の仕方を規定するものであって、彼は自分の意志をこれに従わせなければならないのである。」即ち、頭脳の働きが人の労働のいわば種差として指摘されているのである。目的はすなわち事物への欲求であり、同時にそれを実現するための手順、「客観的法則性の意識的適用」である。目的はそれゆえ、実践とは無縁な純粹観念、願望ではなく、「自然の人間化」たる労働によって現実化されるものであり、労働の本質的過程なのである。したがって、人と自然、主客は労働によって観念的かつ実践的に合一される。目的設定およびその現実的獲得のための合法則的（自然に合致した）手順こそ、それゆえ、人の労働の第一の特徴といわねばならない⁽⁵⁾。生物の物質代謝も、生理的でないし欲求から起る反応ないし運動であり、主客の合一過程ではある。しかし、人の労働による自然の獲得は、無限の試行錯誤または淘汰の結果として生物体内に形成され固定された生理的反応・運動能力の所産ではない。生物体の有機的屬性となることによって特殊化される、固定した能力は、特定の対象取得・自己同化にとって最適の合法則性を示してはいるが、同時にそれは生物がその進化の始源に有していたのであろう多様な可能性の喪失でもあり、その結果としての適応である。人の属する霊長類が元来哺乳類としては生理的に進化していない種類であったことは偶然ではない。人への進化は、欲求の実現を一つの生理的能力として固定せずに、知的能力として一般化したことにある。それによって、労働は多様な自然への多様な働きかけとなり、一般的な性質のものとなる。もとより、知的活動自体一つの生理的活動であり、その発達は生理的器官の発達でもあること、いうをまたない。それゆえ、労働は知的活動としても自然的過程として現れるのであるが、他方その知的性格は労働の実践的合法則性でもあり、したがって労働の主体とその客体と、双方の自然の客観的性質並びに過程としても現れねばならない。かくして、労働過程のすべての要

因は労働の知性の発現形態でもある。

マルクスは、人の労働の種差を先の引用文において特徴づけた後に、続けて、「労働過程の単純な諸契機は、合目的な活動または労働そのものとその対象とその手段である」、と述べ、それらの契機を分析する形で労働過程を特徴づけてゆく。叙述の流れにより即していえば、合目的活動としての労働はそのものとしては既に（その客体としての自然のより発展した契機をまたずに）分析されており、今度は自然の労働の対象および手段として、さらに言えば、対象についての若干の規定と手段についての、単純な労働過程の規定としてはおそらく許されうる限りの、詳細な規定として展開される。これらの要因は物または自然それ自体の性質によってではなく、労働との関連によって対象または手段として位置づけられる。叙述量の多寡は意義の大小には直結しないとはいえ、少くとも、労働手段の方が過程においてより複雑な形で、つまりより知的な形で、作用するとはいえるであろう。それゆえ、次の命題が立てられる。「労働手段の使用や創造は、萌芽としては既にある種の動物も行うことだとはいえ、それは人間特有の労働過程を特徴づけるものである……。」即ち、人の労働の第二の特徴づけである。マルクスは直接には労働の合目的性とこれとの関連を述べていない。しかし、それは両者が無関係な別個の規定であるということではなく、逆に、むしろ彼が両者を全然区別していなかったと考えるべきであろう。目的の現実化、合法則化は労働過程のすべての要因に、労働様式、対象、手段に現れねばならない。とはいえ、「労働者が直接に支配する対象は（中略）労働対象ではなく、労働手段である」のだから、労働手段は労働の合法則性または様式を直接に反映する⁽⁶⁾。それゆえ、「何が造られるかではなく、どの様にして、どんな労働手段で造られるかが、いろいろな経済的時代を区別するのである。労働手段は、人間の労働力の発達の測度器であるだけでなく、労働がその中で行われる社会的諸関係の表示器でもある⁽⁷⁾。」

マルクスが行っている労働手段の詳しい規定を追跡することは、ここでは必要がない。ただ、『資本論』第5章における労働過程論の筋道を明らかにしさえすればよい。彼の文章に示されるとおり、「要するに、労働過程では人の活動が労働手段を使って一つの前もって企図された労働対象の変化を惹き起すのである」、ということで、この文に述べられた要因の相互関係を明らかにすることで、十分なのである。まさに、それは使用価値の生産を労働の観点からとらえることであり、その観点からは労働、労働対象、労働手段が、それだけが、現われるのであった。マルクスは、次いで、過程の今一つの面に入ってゆく。即ち、「この全過程をその結果である生産物の立場から見れば、二つの物、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現れる。」マルクスはここでは「生産過程」という言葉は用いていない。とはいえ、既に第4章の末尾で労働力の消費過程は商品の生産過程、剰余価値の生産過程たることが示され、そこには当然使用価値の生産過程は入るのである。むしろ、この段階でも労働過程と生産過程とは区別されていないのである。ただ、上の文において、「生産物の立場」は労働過程の立場そのもの、即ち労働の観点からとらえた過程とは異なることが示されている。素より、「生産物の立場」は、第5章第1節の当初に為された前提、すなわちどんな特定の社会的形態をも捨象した労働過程、から一步も外れていない。とはいえ、「この過程は生産物では消えている」のだから、過程の諸要因もまた結果としての立場からは無用のことである。その代りに新しい規定が浮び上る。同一の要因に対するこの両者の規定は、照射角度の差であり、それ自体として矛盾するものではなく、一つの過程の全体像をなすべく補完しあうものである。

とはいえ、「生産物の立場」からの規定は上の引用につきるのであり、マルクスがそれを導

入したのは次のことを定立したいがためのように思える。「ある一つの使用価値が生産物として労働過程から出てくる時、それ以前のいくつもの労働過程の生産物である別の使用価値は生産手段としてこの労働過程にはいつて行く。(中略)生産物は、労働過程の結果であるだけでなく、同時にその条件でもある。」マルクスは労働対象にしてもまた特に労働手段にしても、どれほど多く「過去の労働の痕跡を示している」かを力説する。労働対象および手段が労働生産物であるか否かは、労働過程そのものの見地からはどうでもよいことである。「生産物は、生産手段として新たな労働過程に入ることによって、生産物という性質を失う。」「今もなお労働過程では、天然に存在していて自然素材と人間労働との結合を少しも表わしていない生産手段も役だっているのである。」ただ、生産にとって役立つ物が生の自然素材から遠ざかればそれだけそれは労働の合目的性に適合させられているわけであり、労働過程がますます人の意志に支配されるようになればなるほど、労働の対象要因に既に人の手を加えていることはますます重要になることではある。しかしそれは、むしろより発展した労働過程に属することであろう。労働生産物が生産手段として再び過程に入ることは、直接には、諸労働過程の連関、社会的労働過程を暗示している。とはいえ、労働の社会的関係を捨象しているここでは、ただ諸物の関連としてだけ示されたのである。

以上第5章第1節における労働過程の叙述は大略三つの段落に分けられよう。第一、労働過程そのもの、第二、その結果としての生産物、第三、労働生産物が再び生産手段として過程に入ることを通じての、過程における対象的要因の消費、である。その全体をつうじて、特定の形態、社会性を捨象した「単純な抽象的な諸契機における労働過程」、そのような個別的労働過程、という限定は貫ぬいており、かかるものとしては、マルクスの分析は必要にして十分なものを提供しているのである。

而して第1節はその末尾に、労働過程の資本家の下への包摂の如何をつけ加える。そのさい、「労働過程の一般的な性質は……もちろん変らない。」即ち、特徴はいわば労働過程の内側ではなく外側に、「一般的な性質」に単に並ぶものとしてだけ表わされる。その第一は、資本家の労働者監督、即ち労働過程の管理であり、第二は、生産物の資本家への帰属である。これらの規定はそれ自体として過程の内面を少しも変えるものではない⁽⁸⁾。それゆえ、労働過程の資本家的包摂と呼んでもよいであろう。それは第5章第2節価値増殖過程の叙述に直接連がるものではある。とはいえ、節尾に置かれていることがはっきりと示しているように、この包摂は価値増殖過程にかかわることではなく、使用価値生産の質的側面にかかわることである。言い換えれば、資本による規定は価値増殖過程だけにかかわることではないのである。こうして、第1節は、抽象的な労働過程の叙述と、その資本家的包摂の叙述と、この二つから成るのである。価値増殖過程は労働過程のこの資本家的包摂を前提とはする。が、価値増殖そのものはこの包摂自体から説明しうるのではなく、別個の根拠によらなければならない。商品の生産過程の今一つの面、価値形成過程、それである。

既に、「商品に表わされる労働の二重性」は定立されており、「その使用価値に物質化されている労働の量」の側面を導き出すことができる。この労働の量が即価値形式的とみなされるのであり、したがって価値増殖過程は、まず第一に価値形成過程として定立される。ただ、商品論では結果としての価値のみが問題になったのと違い、ここではまさにそれを形成する過程が問われるという違いはある。とはいえ、「通らなければならないいろいろな特殊な、時間的にも空間的にも分離されている、いくつもの労働過程が、同じ一つの労働過程の次々に現れる別々の段階とみなされることが出来る。」種々の異なる過程の労働が同じ一つの労働とみなされるのだから、「原料や生産物もまた本来の労働過程の立場から見るとまったく違っ

た光の中に現われる。それらはもはや原料や生産物ではなく、ただ一定量の労働を吸収している物というにすぎない。新たに当該の労働過程で追加される労働についても全く同様であり、ただ生産物に「現在完了形」の一定労働量を追加しただけのことである。このような労働の抽象的、量的側面は、個別的労働過程の立場からではなく、その労働の社会的労働の一分肢たることによる。それゆえ、ここ個別的労働過程における抽象的人間労働の過程こそ、むしろ既に規定された社会的労働の規定の再現に他ならないといってよい。それが価値を形成することもここでは当然のこととして前提される。この価値形成過程が資本のもとで価値増殖過程となるのは、価値形成の本性ゆえにではなく、全然別な、資本家が資本として労働過程の外で支出した価値である労働力商品の価値を越えて価値形成が行なわれることによってである。即ち、価値形成過程を資本家が自己の下に包摂することによってである。ここでも、資本家的支配は過程の内的本性を変えるものではない。資本の過程たる価値増殖過程においても、資本とは別な過程がその基底に在するのである。

第2節の末尾で、いわばこの章の結論が次のように与えられる。「労働過程と価値形成過程との統一としては、生産過程は商品の生産過程である。労働過程と価値増殖過程との統一としては、それは資本主義的生産形態であり、商品生産の資本主義的形態である。」価値形成過程の基底に抽象的人間労働の過程があることは見た。それゆえ、生産過程は具体的有用労働の過程とそれとの統一である。抽象的人間労働がそれ自体としてではなく価値として現れる時、その過程は商品の生産過程となるのである。さらにその上に資本主義的生産の形態がかぶさるのだ、といえよう。この三つの層を成すような資本主義的生産形態は次の二つの特徴を示す。

第一は、価値形成過程—価値増殖過程も過程の本質はこれに帰する—は、人間労働の過程をその基底とすることから言って、労働過程に属し、その一面を成す、ということである。それはマルクスの文章にはっきりと示されていることでもある。「同じ労働過程が価値形成過程ではただその量的な面だけによって現われる。」即ち、価値形成過程は労働過程の量的側面の一現象形態なのである。さらに、「我々が生産過程を二つの違った観点から、(1)労働過程として、(2)価値増殖過程として、考察する時、そこには既に、この生産形態はただ単一な不可分な労働過程でしかない、ということがある⁹⁾。」マルクスは、一方では具体的有用労働だけを表すものとして「労働過程」を用いつつ、他方では価値増殖過程を説明するさいにもそれを「労働過程」のものとして行うのである。また一方では、具体的有用労働において、歴史貫通的な、まさに第5章第一節で定立したような過程に対し、「本来の労働過程」あるいは「労働過程そのもの」等と表現するのである。人は、一度は具体的有用労働を、一度は抽象的人間労働を行うわけではない。抽象的人間労働は、具体的有用労働の過程においてしか存在しえないのであり、まさにそれから抽象されたものに他ならないとはいえ、その抽象は分析の恣意ではなく、現実の当事者の行うものなのであり、そこに独自の側面を有するのである。

第二は、「商品に表わされる労働の二重性」において具体的有用労働と抽象的人間労働が別々に論じられたと同様に、第5章においても、労働過程と価値増殖過程は別々に論じられ定立されていることである。労働過程はもちろん、具体的有用労働の過程として抽象的人間労働を一切顧慮する事なく定立されているし、価値増殖過程もまた、なる程具体的労働がその物質的存在条件を成すとはいえ、それはまさしく、商品という結果におけると同様、過程においても一切の具体性の捨象によってのみ定立されているのである。その限り、ここ第5章の帰結としては、両過程の「統一」は両者が結局は一つの過程であることに基く、いわば即目的なものにとどまるのである。資本主義的生産過程は対自的統一においては未だ論じら

れていないのである⁽¹⁰⁾。

3. 労働過程と絶対的剰余価値の生産

労働過程を抽象的に特定の社会的歴史的規定性を抜いて考察する限りでは、すべての現実的過程に一般的に存在する諸契機だけが明らかにされた。その限りでは、これら一般的諸契機の特定の結合様式は、社会的にはもちろんのこと技術的にも定立しえないのであり、したがって本来社会的歴史的である特定の労働生産力も全然定立しえないものである。しかし他方では、現実の労働過程は、帰すればこれらの一般的諸契機であり、要素的にそれ以外のものが加わるわけではない。現実の労働過程は一般的諸契機の特定の形態、その特定の結合様式以外の何物でもない。両者は論理的には上向一下向の関係にあるものである。ところが、『資本論』は一般的な諸契機を定立した後で、直ちに現実の労働過程に上向してはいない⁽¹¹⁾。そうではなく、その一般的な労働過程をその一側面とする資本主義的生産過程、それへの上向なのである。そのさい、このような労働過程と資本主義的生産過程との関係はどうであろうか。労働過程は、資本の生産過程から下向的に定立されたものであるが、それ自体で定立され、他者を前提してはいなかった。資本主義的生産過程は、この自立的過程を自己の単なる一側面として含むだけであろうか。資本の本来の目的は剰余価値であり、したがって、「労働過程はただ価値増殖過程の手段でしかない⁽¹²⁾」のだから、労働過程の現実の様式は資本にとってどうしてもよいことのように見える。しかしながら、他方で、価値増殖過程は一旦いわば抽象的人間労働だけによって説明され、資本の個別的な過程に先行する過程も同一の過程の単なる一段のように見なされたが、そこでは、一連の時間的、場所的に異なる諸労働が、如何に個別的労働過程においてその過程の労働生産物に体现されるか、如何にその価値形成に預るかは問題にならなかった。その限りで、第5章第2節の価値形成過程は商品の価値形成を説明しただけで、証明したわけではなかった。そこに、それ自体として抽出された価値形成過程の限度があり、それが究極的に労働過程の中において取り扱われなければならない事象の根拠がある。

ローゼンベルグは、『資本論註解』の中で、「本章（第5章）の研究対象は、価値増殖過程であるかぎりにおいてのみの労働過程である」⁽¹³⁾と述べる。価値増殖過程もまた労働過程であることを指摘しているのは、彼の確かな洞察力である。とはいえ、逆に本来の労働過程の影は薄くなり、第5章の中心的内容は価値形成＝増殖過程の分析とみなされる⁽¹⁴⁾。それを軸にして、彼は『資本論』第5章から第6章への展開を追う。「前章（第5章）ではマルクスは、剰余価値形成の要因を探し出すために、価値形成の諸要因から出発している。しかるに本章（第6章）では、これらの要因のそれぞれの役割にかんする問題が提起され、いわばそれらの結合的作用が明らかにされている。そして前章の目的は、資本は如何にして発生するか、価値はいかにして自己増殖を遂げる価値になるかを、明らかにすることにあつたとすれば、本章の目的は、如何にして価値の一部が可変資本となり、他の一部分が不変資本になるかを研究するにある⁽¹⁵⁾。」見るとおり、ローゼンベルグは、価値形成、増殖過程そのものからそこでの「諸要因のそれぞれの役割」へという形で、つまりその過程の延長線上に、第6章を位置させている。だが実際には、第5章では価値形成の「諸要因」は述べられていないのである。既に見たように、唯単に抽象的人間労働が、その体现している使用価値の形態やその使用価値の労働過程における役割の如何にかかわらず、またそれが為された時間・場所にかかわらず、唯一の価値形成要因として取り扱われているのである。「価値形成の諸要因」をいうことで、また「これらの要因のそれぞれの役割」を提起することで、ローゼンベルグは、事実上、

労働過程と価値増殖過程の両者をその統一において論ずる必要を認めている。しかし、労働過程の諸要因が如何に価値形成過程を規定してゆくかという形では、問題を提起していないのである。

第6章は次の主題提起とともに始まる。「労働過程のいろいろな要因は、それぞれ違った仕方では生産物価値の形成に参加する。」ここで初めて、労働過程が価値形成を規定してゆく関係が提起される。もとよりそれは両過程の統一としての労働過程、すなわち資本主義的生産過程においてである。この点で、第6章は第5章の直接的な続きであるとともに、その結論をも成すといえよう。価値形成過程だけの考察では、当該の労働過程に入る先行の過程の生産物は、当該過程の単に時間的に先行する価値形成過程として、結果としての生産物価値においてとらえられたのに対し、資本主義的生産過程では、一方において抽象的人間労働によって新価値を形成すると同時に、過去労働によって形成された価値が「如何にして」新生産物の中に「移転されることによって保存されるか」が考察される。マルクスはそれを具体的有用労働の所為とする。(ただし、この関係は、本来具体的有用労働と抽象的人間労働との間に成立するものである。およそ労働時間が問題となる社会であれば、先行の労働過程の時間もまた、当該の過程の中に移転・保存されなければならない。抽象的人間労働が価値を形成する社会においてのみ、それは具体的労働と価値移転との関係として現れる。)労働過程におけるこの関係は、それが資本の下で行なわれることによって変らない。資本は労働のこの二重の機能に二重に支払うわけではない。「価値をつけ加えながら価値を保存するということは、活動している労働力の、生きている労働の、一つの天資なのである。」そこで、「我々は、生産物価値の形成において労働過程のいろいろな要因が演ずるいろいろに違った役割を示すことによって、事実上、資本の価値増殖過程で資本のいろいろな成分が果す機能の特徴づけたのである。」こうして、資本は生産過程において不変資本、可変資本という新たな規定を与えられた。

この規定は、第一に、資本の特殊な規定ではなく、「価値増殖過程の立場」から生ずるのであり、まさに資本の本質的な規定、資本概念の必然的帰結である。第二に、それは可能性としては資本による労働力の買の中に含まれていたとはいえ、労働過程における規定であり、それゆえこの過程の中で、資本は自己を形成してゆくのである。第三に、それは「価値増殖過程の立場」の規定であるが、それを与えるのは労働過程、しかもその一般的な諸契機であり、こうして資本主義的生産過程の両過程は、実際の「統一」の中で、その相互関係の中で、考察されたのである。

その場合、労働過程そのものは資本主義的な過程として行なわれることによって、新たな特徴を帯びはするが、それ自体の過程、その諸要因のこの過程における関係、は何等変更されていない。労働過程は外から形式的に資本のもとに包摂されただけである。それに対し、資本の本来の目的たる価値増殖過程の十分な論理的統一のためには、資本主義的生産過程の全体、すなわち労働過程と価値増殖過程の統一としての過程、を示す必要があった。資本は、最初、純粋な価値概念のうちに示された。次にその成立条件としての労働力という商品の使用価値により規定され、さらにその使用価値の現実的利用の過程における規定の発展へと必然的に展開してゆく。そこでマルクスは次の命題を立てる。「使用価値の形態規定が、この場合には経済的関係の展開にとって、経済的範疇の展開にとって、本質的にさえなる⁽¹⁶⁾。」

労働過程そのものは資本にとって「価値増殖のための手段」ではあっても、それによって目的実現過程を規定するのである。手段たることは、資本にとってそれを軽んずる理由には決してならない。労働過程の合目的性(社会的必要労働時間による過程の規定も含めて)に

資本が全面的に服さなければならないというだけではない。使用価値の形態規定は、労働過程がそれによって発展させられ、資本を規定してゆくが故に、逆に資本の本性がその労働過程の中に顕現せねばならない。いわば、資本は労働過程と一つになり、新しい過程を形成してゆくともいえよう。ただしこの場合、労働過程の諸要素はあくまで一般的なものであり、それらの特定の組合せ、労働様式、生産力は、この次元では、語れない。そこでマルクスはこの資本主義的生産過程の展開を次のように表現する。「資本主義的価値増殖程のこの（資本が、社会的必要労働時間による規制に従いつつ、より大なる剰余価値をめざすという一引用者）特有な性格によって、生産過程における資本の現実の姿、資本の使用価値としての姿も、さらに進んだ変化を与えられる。第一に、生産手段は、必要労働の吸収のためだけでなく剰余労働の吸収のためにも十分な量で存在していなければならない。第二に、現実の労働過程の強度も（注意！一引用者）外延も変化する⁽¹⁷⁾。」

資本がその本性によって資本主義的生産過程、「現実の労働過程」を変えてゆくという。ただしその変化は内包的および外延的である。すなわち、労働過程の諸要因は直接にはそのことによって変化しないのである。するとこの場合、内包的・外延的变化の始まるべき基準、一点が必要となる。それらは労働過程それ自体から定立されるべきものではない。なぜなら過程は変化の前も後も同一なのだから。上の引用文は『資本論』の直接的生産過程考察の終了後のものだから、既に必要労働の概念は与えられていた。ここでも、それらの概念の内容そのものを検討することは必要ないであろう。ただ確認すべき事はこれらの概念の成立根拠である。その基準は資本にとって労働力に支払った価値の回収点なのだから、労働力の価値の実体的根拠が問題になる。それは労働力の再生産、その必要労働時間であり、こうして、労働過程の量的側面と同一の根拠に還元されたわけである。剰余価値率即ち価値増殖における不変資本の捨象は価値増殖の本性に由来する。それに対し、必要労働と剰余労働、労働日は、論理的には剰余価値率から導かれたとはいえ、それ自体として資本を前提しないものであり、逆にそこまで下向すれば、剰余価値こそ剰余労働が労働者から分離される特定の形態となるものであった。必要労働は、第一に、労働力の再生産にかかわるものだから、「労働の社会的形態にかかわりなく⁽¹⁸⁾」存在するものである。それは労働過程そのものに属する規定ではないとはいえ、全く同一の論理次元に立つものである。第二に、それは「必要労働時間を労働日の一部分にするだけの労働の生産性の発展を必要とする⁽¹⁹⁾。」この点では、剰余価値の実体を成す剰余労働はある一定の歴史的条件を内包する。

とはいえ、両者はともに特定の歴史的な労働過程、労働力の再生産の仕方を前提しないことでは、共通であり、なによりもおよそ資本主義に固有な条件には無縁のことであった。それゆえ、剰余価値の生産、即ち資本主義的生産過程は、およそ非資本主義的な労働過程の諸条件によって規定されることによって初めて成立する。この中での剰余価値の生産が「絶対的剰余価値の生産」である⁽²⁰⁾。

こうして、「労働過程」の考察が絶対的剰余価値の生産の論理次元に属する理由、『資本論』第三篇に置かれている理由、を明らかにすることができよう。資本による剰余価値の生産を説明するためには、労働過程そのものとりわけ資本の買った商品の使用価値である労働の解明、およびその商品の価値の成立条件すなわち労働力の再生産条件の解明、が必要であった。そしてそれだけで十分であった。即ちその両者が剰余価値の生産そのものの必要十分条件であった。その上で展開される過程、絶対的剰余価値の生産は、純粹に資本そのもの、資本と労働力商品との関係、だけから説明される。なぜなら、そこでは生産過程を資本主義的なものとして特徴づけているものは、資本と労働力商品とのこの関係、はじめに市場における商

品所有者どうしとしての関係、次いで生産過程における資本による労働力消費および剰余労働採取の関係、即ち生産過程における資本と労働力商品との関係＝資本主義的生産関係、なのだけだから。絶対的剰余価値生産の「絶対的」とは、資本即ち資本主義的生産関係それ自体による、の意と解することができる。

マルクスは、絶対的剰余価値の生産過程を次のように叙述する。「生産過程の中では資本は労働に対する、即ち活動しつつある労働力または労働者そのものに対する指揮権にまで発展した。……資本は、さらに、労働者階級に自分の生活上の欲望の狭い範囲が命ずるよりも多くの労働を行うことを強要する一つの強制関係にまで発展した⁽²¹⁾。」こうして、資本主義的生産関係の特徴が労働過程において示され、労働過程が資本主義の特徴を与えられる。とはいえ、「資本は、さしあたりは、歴史的に与えられたままの労働の技術的諸条件をもって、労働を自分に従属させる。したがって、資本は直接には生産様式を変化させない。……労働日の単純な延長による剰余価値の生産は、生産様式そのもののどんな変化にもかかわりなく現れたのである⁽²²⁾。」資本主義的生産過程における労働者に対する剰余労働の強制関係としての資本、それは資本の発展した規定であるとともに、資本の最初の本質的規定だけから必然的に生みだされた客観的關係でもある。しかし、それは労働過程そのものに独自の様式は与えていない。マルクスは、そのことを「与えられたままの労働の技術的諸条件」、「直接には生産様式を変化させない」、と表現するのである。絶対的剰余価値の生産では、特定の「労働の技術的諸条件」は直接に何も言及されることなく、労働過程はあくまで歴史貫通的なものとしてだけみなされたのであった。そこでの労働過程は、直接には、現実の資本主義的な労働過程から抽出されたものであり、それにより資本主義の特徴を失ったものであった。上のマルクスの文では、その論理的過程が歴史的な過程として表現されているのである。なぜなら、資本に先行し資本が包摂する「労働の技術的諸条件」ないし「生産様式」は、もちろんそれ自体として特定の歴史的特徴をもっており、したがって資本をもその労働様式、生産力によって実際には特徴づけているが⁽²³⁾、ここではその特定性の故にではなく歴史貫通的性格の故に、資本に包摂され、剰余価値生産の手段とされたのである。剰余価値の生産それ自体即ち絶対的剰余剰余価値の生産のためには、資本にとって所与の「労働の技術的諸条件」即ち非資本主義的なそれで十分であった。ここに論理と歴史との照応を見ることができる。とはいえ、それは、歴史によって論理が形成され証明されているのではなく、論理によって歴史が説明され、それによって論理が実証されているのであるが。

こうして、労働過程の分析から始まる絶対的剰余価値の生産の論理展開は、特定の労働過程あるいは生産様式は含まないのである。その論理次元は資本主義的生産様式の分析は含まないのである。マルクスはその次元を「資本のもとへの労働の形式的包摂」と呼び、次のように位置づける。「それはすべての資本主義的生産過程の一般的な形態である。しかし、それは、同時に、発展した独自に資本主義的な生産様式と並ぶ一つの特異な形態でもある。なぜなら、この独自に資本主義的な生産様式はかの一般的な形態を含んでいるが、後者は必ずしも前者を含んではいないからである⁽²⁴⁾。」それゆえ、「(絶対的剰余価値の生産は、)資本主義的体制の一般的な基礎をなしており、また相対的剰余価値の生産の出発点をなしている⁽²⁵⁾。」文意は明析である。資本主義的生産は資本による労働の包摂から出発するのだから、ただ資本によって、この包摂それ自体によって、即ち資本主義的生産関係によってだけ、資本主義的に特徴づけられる過程たる絶対的剰余価値の生産は、すべての資本主義的生産に貫通する「一般的な形態」であり、その論理的・事実的出発点としての「一般的基礎」なのである。

4. 独自の資本主義的な生産様式 ——相対的剰余価値の生産、定立の必然性

ここでは、相対的剰余価値の生産の内容をではなく、その論理次元の定立が『資本論』の展開にもってくる意義を追求する。前段で見たように、資本主義的生産過程の一般的形態としての絶対的剰余価値の生産は、資本のもとへの労働の包摂だけから説明される—それ故、形式的包摂と呼ばれる—のだから、生産過程それ自体は、その諸要因の内的関係はこの包摂自体によっては変化しないものであった。すなわち、生産過程の内的関係は非資本主義的なままで、「歴史的に与えられたままの労働の技術的諸条件」で、あるいは「生産様式の変化なし」で、構わなかった。しかし今や、単に形式的にはではなく、実質的に資本主義的生産に独自の生産様式を明らかにせねばならない。事実、資本は生産過程の単なる形式的包摂に停まるものではなく、実質的にそれを変化させ、独自のものにつくりあげてゆく。「独自の資本主義的な生産様式」それである。

『資本論』においては、「資本主義的生産の一般的基礎」から「独自の資本主義的な生産様式」への発展は、絶対的剰余価値の生産から相対的剰余価値の生産への移行として行なわれる。それは、剰余価値の追求という資本の本性に則っており、したがって剰余価値率の概念さえ定立されれば、直ちに浮び上るその実現および上昇の二方法なのだから、巧妙な論理展開ではある。けだし、両者は剰余価値追求の、剰余価値率上昇の、二種類の方法として定立されたことのうちに、生産過程の異なる次元を秘めているのであり、したがって両者は段階的に解明されなければならないものなのである。そのさい、絶対的剰余価値の生産にとっては生産様式は「変化しない」即ち所与のままでもよかったが、相対的剰余価値の生産はそうではないのだから、その論理次元を明らかにするためには、「生産様式」の内包する範囲を定めておかなければならなかった。

先に、絶対的剰余価値の生産で、「労働の技術的諸条件」と「生産様式」が連続して叙述されている文章を引用した。あの文脈にあっては、両者は等置されているといえるであろう。さらに、相対的剰余価値の概念が定立されるまさにその箇所、次のような、定義ともいえる文章を見ることができる。「(労働の生産力は)、彼の労働手段か彼の労働方法かまたはその両方にある変化が起きなければ、二倍になることはできない。したがって、彼の労働の生産条件に、すなわち彼の生産様式に、したがってまた労働過程そのものに革命が起きなければならない。」ここでは、(労働者の)労働の生産条件、生産様式、労働過程、をほぼ等置できよう。さらに、ここで、生産様式は特定の労働の生産力を構成するものとして定立されていることを見ることができる。さらに同じ段落の末尾で、「労働の生産力を高くするためには、(中略)資本は労働過程の技術的および社会的諸条件を、したがって生産様式そのものを変革しなければならない⁽²⁶⁾。」これは「生産様式そのもの」の明白な定義である。以上の用法で明らかかなことは、まず第一に、「資本は直接には生産様式を変化させない」のだから、生産様式は資本または資本主義的生産関係とは区別されているということである。ただし、そのことが直接意味することは、両者が別個な相互に自立した範疇だということではなく、資本主義的生産関係はそれ自体としては資本主義的生産様式を含まないということにつきる。そこからは、資本主義的生産様式の内包については何も言えないのである。第二に、その上に、生産様式は個別生産過程における現実の労働過程、即ちその特有のあり方——その場合、その労働過程の技術的または社会的条件のおよびこの両者の関係の如何を問わず——以外の何物でもないということである。

現実の労働過程たる生産様式は、資本主義的生産にあつては、相対的剰余価値の生産の段階で初めて定立される。即ち、それはいままで資本にとっては「与えられたもの」に停まっていたが、ここでは資本によって「徹底的に変革され」、「独自の資本主義的な生産様式」になる。相対的剰余価値の生産がこれを前提すること、マルクスの強調するところである。したがって、生産様式の変革以前すなわち絶対的剰余価値の生産では、資本主義的生産関係および資本主義的生産過程は成立していても、生産様式は「独自に」資本主義的ではないのである。労働過程と価値増殖過程の統一に対して、マルクスが資本主義的生産過程と呼んでいるのは意味のないことではない。事実、彼は、固有に絶対的剰余価値の生産を指す場合には、「資本主義的生産様式、die kapitalistische Produktionsweise」という言葉は用いていない。先の引用でもそうであったが、今一つ例を挙げておきたい。「剰余価値の(絶対的)形態は資本によって変形された生産様式にとつても依然としてその基本形態ではあるけれども、資本が労働過程をただ形態的にだけ自己のもとに包摂したにすぎないかぎりでは、つまり実際には、人間の手労働が生産の主要因であるような以前の生産様式が資本の統御のもとに取り込まれたにすぎないかぎりでは、未だ剰余価値の絶対的形態が資本の生産様式(die Produktionsweise des Capitals)にとつて固有のものであり、この生産様式の唯一の形態である…⁽²⁷⁾。」この文の内容は今更繰り返す必要はない。ただ、「資本の生産様式」という表現だけが注目される。それが「形態的にだけ資本のもとに包摂」されている生産様式を指すことは明白である。この言葉は、『草稿』においても「資本主義的生産様式」という表現は行なわれているのだから、それと区別されるために用いられていると考えてもよいであろう。そして、『資本論』においても、「資本主義的生産様式」は「独自の資本主義的な生産様式」だけでなく、極く少ない使用例であるが、剰余労働の獲得を指す場合にも使用されている。しかしその場合も、「資本主義的生産様式」は絶対的剰余価値の生産段階を、論理的にも歴史的にも、固有に指示しているのではなく、剰余労働時間の資本家的取得がすべての資本主義的生産様式の基礎にあるという意味で使用されるのである⁽²⁸⁾。重要な事は、相対的剰余価値の生産段階の資本主義的生産は、生産様式を変革し「独自の資本主義的な」ものに編成されており、絶対的剰余価値の生産段階のそれとははっきりと区別されているということ、その区別は論理的でも歴史的でもあるということ、である。

「独自の資本主義的な生産様式」——「独自の」は明らかに「形式的な」に対する謂である——は、「労働の実質的包摂」のもとに変革された現実の労働過程を有し、その点で「労働の形式的包摂」と区別されるが、しかし他方、『資本論』の展開においては後者を基礎にして、そしてそのことによつてのみ、展開される。歴史的にも、独自の資本主義的生産様式は、「資本主義的生産様式の基礎⁽²⁹⁾」を形成する過程のあとに初めて形成された。それは、単にその形成者としての資本を前提するだけでなく、その現実の労働過程の諸契機すべてに資本主義の特徴を有しているのである。すなわち、資本主義的生産関係はこの生産様式の内的要因の一つなのである。もちろん、そのさい、資本主義的生産関係とは現実の労働過程における労働者および資本家の存在形態に他ならないが。この点は、生産様式は生産諸力の編成様式であり、それ自体として生産関係を含まず、したがって、資本主義的生産様式は資本主義的生産関係によつて形態規定された生産様式である、と主張する論者に対する、明確な批判の基準を成す⁽³⁰⁾。資本主義的生産様式は、完成したものとしては、ある所与の生産様式を資本が形態規定するだけで成立するものでは決してない。既に見たように、それでは絶対的剰余価値の生産に停まるのである。この後者の次元、即ち資本主義的生産様式の(一般的)基礎の上に、直接にはそれだけを条件にして、行なわれる資本主義的生産過程にあつても、資

本と労働過程とは別物ではない。「資本による労働の形式的包摂」は、身体と衣服のように労働過程を資本が外から包摂するのではなく、まさに労働過程そのものに与える独自の形態であり、存在するのは一つの統一した過程以外の何物でもない（資本即ち資本主義的生産関係は、ここでは一つの過程といってもよい）。資本主義的生産関係と労働過程——両者の相互規定関係は既に見た——が資本主義的生産過程を構成するのである。そしてそれが、マルクスの表現によれば、資本主義的生産様式を含むとは限らないが、後者の基礎をなすのである。それに対し、独自の資本主義的生産様式は、この「基礎」を含み、それをつうじてのみ定立できるのだから、より高い次元に属している。即ち、絶対的剰余価値の次元が、未だ資本主義的生産様式は定立させていないものの、それに至る必要な一段階を成し、相対的剰余価値の次元が、論理的にも歴史的にも資本主義的生産様式を定立するのである⁽³¹⁾。したがって、こうして定立される資本主義的生産様式は、直接には現実の労働過程、そこでの労働者と生産手段との独自の結合、を意味するが、それは、広く、その成立のための諸条件、とりわけ労働過程そのものを独自の編成に至らせる内的契機、を必要とするのだから、現実の労働過程をも一つの内的契機とする一過程(さらにいえば、再生産過程)でもある。こうして、『資本論』の展開は、資本主義的生産様式の定立に至る各段各段を表すともいえよう。そしてそれは、資本の内的本性によって為される過程として一つの秩序を有しているのである。ただし、他方ではこの資本の内的本性は物質的生産過程の技術的・社会的条件により規定されている。資本の内的本性だけで資本主義的生産様式が即席にでき上るわけではない。物質的生産過程は、技術的にも社会的にも直接には資本とは別な要因を有している。しかし、『資本論』は、これら別の要因によって一つの生産様式を定立するのではなく、まさに資本とこれらの要因とを一つの過程に結合させて、資本主義的生産様式を構成するのである⁽³²⁾。

以上、資本主義的生産様式の成立に必要な条件および成立の論理次元を、その内的構成すなわち労働過程の諸要素の具体的結合の形態は別にして、『資本論』に即して明らかにしてきたと考える。『資本論』の展開は、明確な方法的限定と順序に基づいて、その生産様式の条件およびそれらの条件の相互関係を一段ずつ明らかにしてゆくものであった。そこで、今一つ次のことを指摘しておかねばならない。今まで検討してきた論理の流れに従えば、資本主義的生産様式は、資本によって最初は形式的に次に実質的に形成されるのであり、それは歴史的な順序とも合致するものであった。言い換えれば、資本が自己に照応する生産様式を必然的に形成してゆくのである。ところが、『資本論』冒頭の課題設定は、他ならぬ「資本主義的生産様式およびそれに照応する生産関係と交易関係」であって、決してその逆ではない。事実、マルクスの一貫した思想もこの後者にあること、いうをまたない。しかし、一見「矛盾」に見えるものは実際にはそうではなく、それこそ『資本論』の論理展開の特徴なのである。それは、最初に設定された概念の単なる一方交通的な発展過程では決してないのである。マルクスは、第3篇および第4篇に続き、両者を総括する一篇を設ける。それは、今まで別々に論じてきたものをここで改めて両者の相互関係および統一においてとらえ、次の展開の出発点とするためであるが、その中で次のように述べる。「絶対的剰余価値の生産のためには、資本のもとへの労働の単に形式的な従属だけで十分だとしても(中略)、他面では、相対的剰余価値の生産のための諸方法は同時にまた絶対的剰余価値の生産のための諸方法でもあるということが示された。実に、労働日の無制限の延長こそは、大工業の最も固有の産物だということが示された。」すなわち、ここでは相対的剰余価値の生産が絶対的剰余価値の生産の前提である。両者の現実の関係に立入ることはここでは無用であるが、明らかにせねばならない事は、この規定・被規定が両者の論理に内在して行われねばならないという事である。絶対

的剰余価値の生産は単なる剰余労働時間の延長すなわち資本によるその強制なのだから、相対的剰余価値の生産の中でそれが行われるためには、そこで資本のこの強制力すなわち資本主義的生産関係に何らかの変化が生じなければならない。そこでの生産様式の変革すなわち独自の資本主義的生産様式の形成は同時に資本主義的生産関係を変革し、「資本による労働の実質的包摂」を成立させる。『資本論』第三篇の一つの大きな主題が、実にこの生産様式の変革に伴う生産関係の変化、さらに正確に言えば、資本主義的生産様式による自己に照応した生産関係の形成、に置かれていること、そしてその形成が自己の確立の「基礎」、不可欠の要因であること、いうまでもない。絶対的剰余価値の生産において、初め資本およびその労働支配力は前提であり「形式的に」定立されたものであった。ここでは、その前提は自分から出発した帰結によって規定されている。いや、正確には、資本自身の前提性はここでは解消されていない（その解消は資本の再生産過程で行われる）が、現実の資本主義的生産関係、資本の労働包摂が現実の労働過程の中でその根拠を得るのである。歴史的に、資本主義的生産様式が確立されていなかった段階では、それ故、資本およびそれを形成する本源的蓄積によって資本主義的生産様式が形式され始めていても、資本主義的生産関係すなわち現実の労働過程における資本の労働支配力は十分発達しなかったのである。

資本主義的生産様式は、一つの統体、一つの包括的過程であり、資本よりも（また労働過程そのものやその技術的条件よりも）高い次元を表わしているのだから、その理論的定立のためにはその構成要因にまず下向してゆかねばならない。「そこから再び後方への旅が始められるべき」である。この旅の後で初めて、当初前提として定立したその構成各要因の前提性は消え、それらは「既に与えられている具体的な、生きている全体の、抽象的・一面的関係としてのほかは、決して実在するはずがない⁽³³⁾」それらは資本主義的生産様式の中に位置づけられて初めてその真の意義を、当初前提された内容を、実際にはそこで獲得するのである⁽³⁴⁾。生産様式を生産力と生産関係との統一として把握する思考の無概念性は、生産関係と生産力を切り離して規定し、あとで言葉の上でだけ「統一」するところにある。資本の発展した十全な規定たる資本主義的生産関係は、相対的剰余価値の次元で独自の資本主義的生産様式に照応するものとして確立されるのである。とはいえ、後方への旅はそこで終るのではなく、資本主義的生産様式のすべての条件がこの生産様式によって再び結果として「生産」される所まで進まねばならないのであるが。

(1)レーニン、「カール・マルクス」、『レーニン全集』1957年大月書店、47ページ。レーニンは一貫してこのように定義している。「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」（『全集』第2巻、191ページ）、「ロシアにおける資本主義の発展」（『全集』第3巻、40ページ）参照。

このような定義はエンゲルスを嚆矢とする。「経済学がとり扱うのは、物ではなくて、人と人との間の関係であり、結局、階級と階級との間の関係である。だが、これらの関係は、いつも物に結びつけられており、物として現れる。」エンゲルス、「カール・マルクス『経済学批判』」（マルクス『経済学批判』、国民文庫1953年252ページ所収）。さらにスウィージー。「（マルクスは）経済学の諸範疇は、社会的範疇でなければならぬということ、すなわち、人と人との関係をあらわす範疇でなければならぬという厳密な要請を課する。この点が近代経済理論の態度とは鋭い対照をなしていることを理解することは、きわめて大切である。」スウィージー『資本主義発展の理論』都留重人訳 新評論 1967年29～30ページ。物の背後にある人と人の関係、さらには階級関係をとらえ暴露することは、鋭い、痛快なことではある。生産関係の現実の変革即ち革命にその生涯をささげたような人にとっては、上記の定義のような思想はある意味で必要であったし、また許せることでもある。しかし、その思想を極端まで押し進める時、ある特定の生産関係の絶対否定と生産力そのものの絶対肯定が出現する。

(2)生産様式概念を「労働過程論の規定」によってとらえる論者は、そこを根拠にするといつてよいであろう。

芝田進午氏。「最近、マルクスの『生産様式』概念には…わたくしのいう労働過程論的な規定（中略）があることがひろくみとめられてきた…。」（『疎外』「講座・マルクス主義研究入門・1」青木書店、1975年所収、216ページ）生産関係抜き「労働過程論」把握が、芝田氏等とは対立的な見解の所有者、林直道氏にも共通することは、拙稿「本源的蓄積と所有・生産様式」の概念」（岐阜大学教養部研究報告第13号）において指摘した。

- (3) 訳文は、マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会のものによったが、変更した箇所もある。以下、『資本論』からの引用の中で、容易に典拠を推測しようと考えたものは、典拠の指示を省略した。
- (4) 「人間が自然によって生きるということは、すなわち、人間が死なないためには、それとの不断の（交流）過程の中に留らねばならないところの、人間の身体であるということなのである。人間の肉体的および精神的な生活が自然と連関しているということは、自然が自然自身と連関していること以外のなにごとをも意味しない。というのは、人間は自然の一部だからである。」マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波文庫、94ページ。だから、労働の本質把握は一貫して変っていない。ただ『経哲草稿』では、この活動が直ちに人の「類生活」であり、また直接に「疎外された労働」の中で考察される。
- (5) マルクスの労働観はこの点一貫している。「動物はその生命活動と直接的に一つである。…人間は自分の生命活動そのものを、自分の意欲や自分の意識の対象にする。……意識している生命活動は、動物的な生命活動から直接に人間を区別する。まさにこのことによつてのみ、人間は一つの類的存在なのである。」「『経哲草稿』95～6ページ。ここでは、この意識的な生命活動がそのまま人の類的存在とされており、『資本論』の「労働過程論」に見るような、人と自然との過程の純粹把握は見られない。とはいえ、初期の見解が放棄されたのでは決してなく、後に検討するように、その純粹把握こそ、その中に「類的存在」を見るための方法の精密化に他ならない。
- (6) 中村静治氏は逆に次のように述べる。「労働者が目的を知っていて、それに合致するようにかれの行動のしかたを規定しているのも、人間は他の動物とちがって、対象＝自然との間に石や金錠などいま一つの物体をおいているからである。このさい、人間が直接に支配するのは、石や金錠などの道具＝労働の手段であって、人間の働きかけは対象には間接にしか作用しない。それゆえ、あらかじめ結果を論理的に予定しなければ目的を達することはできない。したがって、人間特有の目的意識性は手の延長としての物体の使用から生まれるので、その逆ではない。」（中村静治『技術論入門』有斐閣昭和52年、32ページ。）
- 「働きかけは対象には間接にしか作用しない」が故に、目的意識性が生まれるのではない。労働手段の使用は人の自然への働きかけをはるかに強度に精確に多様にする。とはいえ、その使用の根源は対象および手段の自然を知ることにある。
- (7) この主張の前提的含意は、経済的時代が生産様式によって決定される、ということである。その生産様式によって労働手段の意義が決定的なのである。労働手段と遺骨との類推に示されるように、一つは歴史的遺物にその時代の特徴が示されるということであるし、より本質的には労働手段は特有の労働様式を前提するということである。労働対象もまた全然歴史的特徴を示さないわけではない。引用の命題に関連してマルクスはこう述べる。「すべての商品のうちで、本来の奢侈品は、いろいろな生産時代の技術学的比較のためには最も無意義なものである。」
- (8) 「人間においては……労働の原動力と労働それ自体との統一は、切断可能ではない。構想と実行との統一は分解されうる。依然として構想は、実行に先立ち、実行を規制しなくてはならないが、しかし、ある者が構想した観念を他の者が実行に移すことは可能である。」（H.ブレイヴァマン『労働と独占資本』富沢賢治訳 岩波書店 1978年、55ページ。）
- ブレイヴァマンはほとんど専ら、資本の包摂の下における具体的有用労働の変化を追求する。したがって、直ちに「管理」の問題を提起し、「資本主義に独自の管理様式としたがってまた生産様式とが一般化したのは比較的近年のこと、つまりこの100年以内のことである。」という興味深い論点を呈示する。
- (9) マルクス『直接的生産過程の諸結果』岡崎次郎訳、大月書店、34ページ
- (10) 吉原泰助氏が、一方で「価値形成過程は…労働の抽象的人間的属性にのみかかわりをもつ」といいつつも、他方「価値形成過程は、抽象的人間労働による新価値の創造過程と具体的有用労働を媒介とする生産手段の価値の移譲過程との統一という同時二面的過程としてあらわれる」というのは、正確ではない。

価値形成過程はそれ以外の要素は一切捨象しているものであり、生産手段の価値の移譲にはかかわらない。

- (11) それこそ、マルクスが一貫して否定したことである。仲村政文氏が、「マルクスは商品論においては、〈生産一般→交換価値〉の構想は放棄したが、この構想は、〈労働過程=生産過程一般→資本の生産過程〉という形で実現したということである」(仲村政文『分業と生産力の理論』青木書店、1979年、151ページ)、と述べるのは正しくないと考える。ここではマルクスは、資本の生産過程から抽象的過程へ下向しているのであって、抽象的過程それ自体から上向しているわけでは決してない。
- (12) 『直接的生産過程の諸結果』34ページ。
- (13) ローゼンベルグ『資本論註解』第1巻 梅村二郎訳 開成社、269ページ。
- (14) ローゼンベルグは、それ故、労働過程定立の意義を次のことに求める。「価値増殖過程から労働過程を分離することによって、資本制生産の現実の矛盾が、すなわち人間の永久的な生存条件としての労働過程とその資本制的形態との矛盾が、明らかになる。」(同、270ページ) 労働過程の把握がマルクスの人間=社会像の根底にあることはまちがいない。とはいえ、それから直接に「矛盾」をひきだすだけでは、初期マルクスの水準に逆行することになる。労働過程の分離はそれ自体としては資本制生産の「現実の矛盾」ではない。
- (15) 同、同、286ページ。
- (16) マルクス、『直接的生産過程の諸結果』17ページ。
- (17) 同、同、29ページ。
- (18) 同、『資本論』第1巻第1分冊282ページ。
- (19) 同、同第2分冊662ページ。
- (20) 「労働日の延長によって生産される剰余価値を私は絶対的剰余価値と呼ぶ」マルクス、『資本論』第1巻第1分冊、415ページ。
- (21) マルクス、『資本論』第1巻第1分冊、407ページ。
- (22) 同、同、407～8ページ。
- (23) 「資本関係は、長い発展過程の産物である経済的な土台の上で発生する。資本関係がそこから出発する基礎となる既存の労働の生産性は、自然のままものではなく、何千もの世紀を包括する歴史の所産なのである。」マルクス、『資本論』第1巻第2分冊、664ページ。
- (24) マルクス、『直接的生産過程の諸結果』80ページ。
- (25) 同、『資本論』第1巻第2分冊、661ページ。
- (26) 二つの文章は、また、生産力と生産様式との関係をもはっきりと表現している。生産力の上昇は生産様式の変化をつうじてしか現れないのだから、生産様式は生産力の絶対的条件、前提である。生産力は現実の組織=過程たる生産様式の中にしか存在しえないのであり、生産様式の自然支配力に他ならない。ただし、生産力の上昇が生産様式の技術的条件のどの部分にどの様に現れ、どのような作用をもたらすかは別問題である。
- 「生産力は一定の生産方法がもつ富の生産能力にはかならないのである。あるいは生産力は生産様式の生産能力ともいうことができる。」
- 大野節夫『生産様式と所有の理論』青木書店、1979年、619ページ。
- (27) マルクス『資本論草稿集④』資本論草稿集翻訳委員会訳 大月書店、1978年。292ページ。(以下『草稿』と略す。)

ドイツ語は、KARL MARX FRIEDRICH ENGELS GESAMTAUSGABE (MEGA) II3-1, KARL MARX ZUR KRITIK DER POLITISCHEN ÖKONOMIE (MANUSKRIPTE 1861-1863), DIETZ VERLAG 1976, s. 165より。

さらに、「実際歴史的に見いだされるのは、資本がその形成の発端で、労働過程一般を自己の統御のもとにおく…ばかりでなく、技術的に出来あいのものとして資本が見いだすままの、そして非資本主義的な生産諸関係の基礎の上で発展してきたままの、諸々の特殊的な現実の労働過程を自己の統御のもとにおくのだ、ということである。それは現実の生産過程—特定の生産様式—を見だし、はじめはこの様式を、この様式の技術的規定性にはなんの変更も加えないまま、ただ形態的に自己のもとに包摂する。資本は、それが発展

していくなかで初めて、…それを変形し、自己に特有の生産様式を手に入れるのである。」「草稿」145ページ。絶対的剰余価値の生産の段階と相対的剰余価値の段階の差の簡潔な表現である。「自己に特有の生産様式」の範囲は明白である。

(28) 「資本主義的生産様式の基礎の上では、必要労働はつねに彼の労働日のただ一部分をなしうるだけであり、したがって労働日はけっしてこの最少限度までは短縮されえない。」マルクス、『資本論』第1巻第1分冊、301、302ページ。

(29) 同、同、第2分冊、938ページ。

(30) 芝田進午氏は、注(2)で引用した文に引き続いて次のように述べる。「『生産様式』そのものは、『生産力と生産関係との統一』としてではなくて、生産関係、たとえば、資本主義的生産関係によって包摂され、規定された『生産様式』として把握さるべきである」。

大野節夫氏は、芝田氏の生産様式把握における「生産関係の捨象」と「生産関係による包摂」は「矛盾」するとして、芝田氏における両様の主張の「混在」を批判しつつ、生産様式を次のように表現する。「ほかならぬ資本によって包摂された生産こそ資本家的生産したがって資本家的生産様式なのである。生産様式は生産関係を含むものではありえない。それは生産関係に包摂され、規定された生産であり、ただ生産関係からの規定性を含むものである。」同氏前掲書、40ページ。この主張もまた結局、生産関係による生産様式規定を「包摂」の次元でとらえる限り、絶対的剰余価値の生産の次元で生産様式をとらえるものである。

(31) 海道勝稔氏は剰余価値生産の次元を次のように表現する。「剰余価値の生産は資本主義的生産様式そのものであり、この生産様式の基礎的關係を解明する。」(鳥恭彦他編『新マルクス経済学講座1 マルクス経済学入門』有斐閣昭和47年、83ページ)「剰余価値の生産としての絶対的剰余価値の生産、相対的剰余価値の生産を、……ここでは生産力、生産関係の絡み合った資本主義的生産様式そのものとしてとらえる。」(同、83ページ)

剰余価値の生産は資本主義的生産様式の内的契機であるが、絶対的・相対的の次元差を明確にしておかねばならない。絶対的の次元では、生産力は定立されていないのである。さらに言えば、生産力と生産関係の絡み合いというのも奇妙である。直接絡み合うのは、生産様式と生産関係である。

(32) 「生産様式の変革という視点が、マルクスが技術的な過程と経済的な過程との接点を考える中心的な視点であったように思えるのである。(中略)それぞれの(協業、マニユ、機械制大工業—引用者)生産様式は、必ず社会経済的条件と技術的水準とに規定されて成立する。そしてひとつの技術過程の意味は、それがどのように生産様式の変革、あるいは生産様式とつながってくるかという角度から評価される。」中岡哲郎「技術と生産過程」、梅本克己編『講座マルクス主義2 科学とイデオロギー』日本評論社、昭和44年、190ページ、所収。また同氏『工場の哲学』平凡社、1971年、29ページ、参照。

(33) マルクス『経済学批判要綱』高木幸二郎監訳大月書店、23ページ。ただし、そのことは、これらの抽象的要因が他の生産様式に組み込まれて存在しうるということを排除するものではない。

(34) 「農業でも、製造工業の場合と同様に、生産過程の資本主義的変革は同時に生産者たちの殉難史として現われ、労働手段は労働者の抑圧手段、搾取手段、貧困化手段として現われ、労働過程の社会的結合は労働者の個人的な活気や自由や独立の組織的圧迫として現われる。」マルクス『資本論』第1巻第1分冊、656ページ。